

第四章 高槻の気候と生物

第一節 高槻の気候

市内の気候は刻々に変化する気象状態を長い期間について全体としてながめたものであるから、気候資料候を知るには気象観測を相当長い期間にわたって毎日定期的に行い、その結果を記録として集めておかねばならない。気象観測を国家事業として行っているのが管区気象台、地方気象台、測候所、海洋気象台などの気象官署であるが、これらの官署は高槻市内には存在しない。このため、規定の方式にもとづく詳しい気象観測記録を高槻市内で入手することはできないが、これに準ずる気象観測を実施している所は市内にもいくつかある。

高槻市中消防署および原と榎田にある大阪府所管雨量観測所がそれで、このほかにも国鉄高槻駅や京都大学阿武山地観測所、関西電力北大阪変電所などでも、それぞれの業務に必要な範囲で気象観測が行われている。これらのうち、市域南部の低地を代表するものとして高槻市中消防署を選び、北部山地については原と榎田の雨量観測所の記録を利用することにした。

第四章 高槻の気候と生物

中消防署の気象観測記録は、昭和二六年から四〇年までは、各年の『高槻市事務報告書』に、各月の平均気温、降水日数、降水量、最多風向、平均風速、最高風速、平均湿度などが収録されており、四四〜四八年の月平均気温と月降水量などは『高槻市統計書 昭和四九年版』に収められている。この両資料に欠けている四一〜四三年と四九年の分については中消防署に残されている記録から直接おぎなつた。

一方、大阪府所管雨量観測所の観測記録は、大阪府土木部河川課が五年ごとに集約して公表している『大阪府の雨量』によって知ることができる。原観測所は昭和三〇年に、榎田観測所は昭和三六年に設置されたもので、それ以降のそれぞれの降水記録は、ところどころに欠測をはさみながらも、『大阪府の雨量』から抽出しえたが、気温に関する記録は収録されていないため、大阪府土木部河川課に残されている集計原票によって、両観測所とも、昭和三九〜四七年と四九年の月平均気温を採録でき

高槻市内と大阪・京都の気温(°C)と降水量(mm)

3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
8.6	14.8	19.3	22.9	27.0	28.7	24.3	17.8	11.8	7.1	16.1
90.0	135.9	133.8	197.7	212.7	108.7	162.2	104.9	54.6	37.9	1,338.4
6.7	11.0	17.8	21.1	25.6	27.0	22.9	16.8	11.1	5.9	14.5
118.9	172.7	172.4	241.1	234.9	189.9	208.8	116.9	67.6	44.8	1,690.0
3.6	10.4	15.4	19.3	23.3	24.5	19.4	13.5	7.7	2.2	11.7
104.8	155.7	156.7	254.5	233.6	154.5	212.6	119.0	63.0	38.9	1,613.3
8.0	13.9	18.6	22.5	26.8	28.0	23.9	17.6	12.1	7.0	15.6
105	128	143	210	181	100	174	115	81	48	1390
7.2	13.1	18.0	21.8	26.1	27.3	23.2	16.7	11.1	6.0	14.8
112	145	162	252	239	158	204	122	75	50	1638

原は大阪府雨量観測所、榎田は大阪府榎田雨量観測所の各観測記録による。

いては本文を参照されたい。

昭和五十年版』による(1941~70年の平均値)。

1 高槻の自然環境

たにすぎない。

以下、これら市内の観測記録をもとに、大阪管区気象台および京都地方気象台の観測記録をも参考にしながら、高槻市の気候上の特色を概観することにしてしよう。日本全体の気候については和達清夫監修『日本の気候』〔東京堂〕、倉嶋厚『日本の気候』〔古今書院〕などの参考書があり、以下の記述もこれらに負うところが大きい。

気 温 気温と降水量と風は、それぞれの地域の

観測所と大阪・京都の月平均気温および月降水量を示したもので、それをグラフ化すると図四一のようになる。

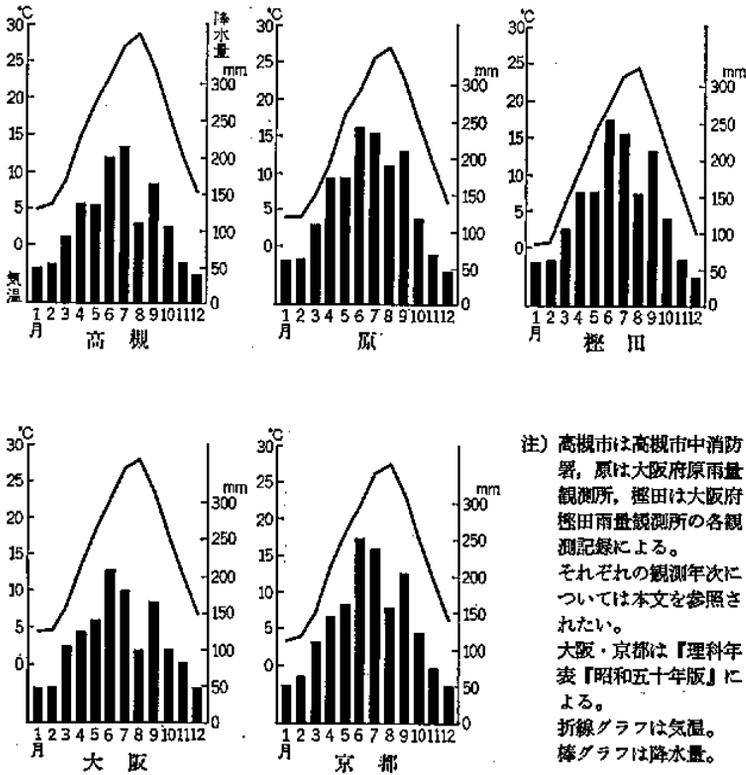
まず気温についてみると、高槻の年平均気温は一六・一度で、大阪の一五・六度や京都の一四・八度よりやや高いが、原では一四・五度、榎田では一一・七度となつて、北部の山間部に行くほど気温が低くなり、標高約三〇〇メートルの榎田では、南部の低地にくらべ、年平均で四・四度も低くなつてゐる。この高槻と榎田との気温差は年間を通じてほぼ同じようにみられるものであるが、両者の月平均気温を比較すると三月と一二月に比較的差が大きくなり、六、八月には小さくなつてゐる。このことは、榎田地区が南部低地に比べて冬の到来が早く、春が遅い一方、夏には相対的に気温差が小さくなることを示している。

表 3

		1月	2月
高 槻	気 温	4.8	5.6
	降 水	47.3	52.7
原	気 温	3.9	3.9
	降 水	59.7	62.3
榎 田	気 温	0.4	0.8
	降 水	58.2	61.8
大 阪	気 温	4.5	4.9
	降 水	50	55
京 都	気 温	3.5	4.0
	降 水	56	64

注) 高槻は高槻市中消防署、それぞれの観測年次につ
大阪・京都は『理科年表

第四章 高槻の気候と生物



注) 高槻市は高槻市中消防署、原は大阪府原雨量観測所、嵯田は大阪府嵯田雨量観測所の各観測記録による。それぞれの観測年次については本文を参照された。大阪・京都は『理科年表『昭和五十年版』』による。折線グラフは気温。棒グラフは降水量。

図41 高槻市内と大阪・京都の気候グラフ

月平均気温が一月に最も低くなり、八月に最も高くなることは市内の三観測点および大阪・京都ともに共通しているが、年次ごとに見ると二月が最低となる年も少なくないのに対して、最高となるのは八月に固定している。一方、これまでに観測された気温の最高および最低記録は表四の通りで、市内の三観測点については、資料を入手しえた統計期間が短いことに若干の問題は残るが、高槻では最高気温が大阪・京都のそれを若干上廻り、最低気温も

1 高槻の自然環境

大阪・京都よりもやや高くなっていること、これに対して北部山地の原や榎田では冬季の冷え込みが厳しいことなどは理解できよう。

榎田の西に続く亀岡市の東別院、西別院地区では、この冬季の冷え込みを利用して古くから寒天製造が行われているが、高槻市域における寒天製造の伝統的な中心地は服部谷で、原盆地で寒天製造が行われるようになったのは最近のことであり、榎田地区では今日もまったく行われていない。服部谷の北へ西を囲む山地や丘陵地はそれほど高くなく、冬季の冷え込みをもたらす北西季節風をさえぎる働きはほとんどもないため、季節風の吹き出しの強い夜には相当冷却されるものと推定されるが、より寒冷な榎田地区や原盆地で寒天製造が発達しなかったことを考え合せるとき、服部谷の寒天製造を冬季の寒冷な気候のみで説明しようとするのでは不十分で、むしろ服部谷のおかれた社会的経済的条件の方を重視することの方が重要であろう。

降水量

高槻の年間降水量は一三三八・四ミリメートルで、大阪・京都よりも少ない値を示しているが、北部山地の原や榎田ではいずれも一六〇〇ミリメートル台を記録して、南部低地の高槻より年間三〇〇ミリメートル程度降水量が多くなっている。

表4 気温の最高および最低記録

地名	最高値			最低値		
	°C	年月日	統計期間	°C	年月日	統計期間
高槻	39.0	1964.8.14	1964~74年	-6.0	1966.2.6	1964~74年
原	39.5	1964.8.14	"	-10.0	1967.1.16	"
榎田	35.0	1970.7.23	"	-15.0	1967.1.17	"
大阪	38.2	1959.8.3	1883~73	-7.5	1968.2.23	"
京都	38.6	1973.8.13	1914~73	-9.4	1945.1.28	1883~1973
					1917.12.27	1914~73

注) 高槻は高槻市中消防署、原は大阪府原雨量観測所、榎田は大阪府榎田雨量観測所の観測記録、大阪・京都は『理科年表昭和五十年版』による。

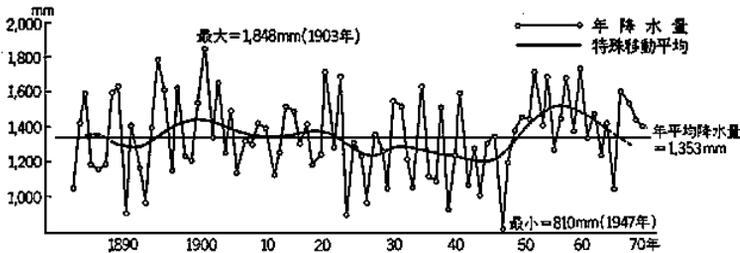


図42 大阪における年降水量の長期変動
 (建設省近畿地方建設局『淀川百年史』1974による)

る。これは北部山地では春から夏にかけて地形性の降雨が多いことによるものと考えられる。

降水量は、気温にくらべて、年次による変動がかなり激しいことに特色がある。図四二は一八八三〜一九六八年の八六年間における大阪の年降水量の経年変化を示したもので、年次による変動の大きさがよく示されている。この間の平均年降水量は一三三三ミリメートルであったのに対して、最大を記録した一九〇三年(明治三〇)は一八四八ミリメートルで平年より三六・六パーセント多く、最小を記録した一九四七年(昭和二二)の八一〇ミリメートルは平均値を四〇・一パーセントも下廻って、最大年降水量は最小年の二・三倍に及んでいる。高槻ではこれほど長期の観測記録を入手できないが、記録の残されている一九五一年以降に限ってみても、最大を記録した一九五二年の一六九七・九ミリメートルは、一九六四年に記録された最小値九二七・〇ミリメートルの一・八倍に達している。

降水量はまた、季節によっても変動が大きい。これを月別の平均降水量についてみると、一二月を中心として一月から二月までの冬期には少なく、六・七月の梅雨期と九月の秋霖期(しゅうりん)に多くなっている。この傾向は北部山地の原・檜田でも高槻や大阪・京都と同じで、なかならず梅雨期の多雨が

I 高槻の自然環境

表5 近年における大阪の梅雨

年次	梅雨入り	梅雨明け	梅雨期間	梅雨期の総降水量(mm)		
				大阪	原	樫田
1964(昭和39)年	6月13日	7月22日	39日	247.0	493.5	413.5
65(40)	6 12	7 25	43	366.0	505.8	540.5
66(41)	5 29	7 13	45	487.5	480.5	448.0
67(42)	6 21	7 13	22	387.3	543.5	570.0
68(43)	6 13	7 17	35	384.5	332.0	354.5
69(44)	6 17	7 15	29	334.5	571.5	619.0
70(45)	6 10	7 18	39	385.0	504.5	505.5
71(46)	6 3	7 28	56	273.5	344.0	322.0
72(47)	6 3	7 17	45	516.5	584.5	576.5
73(48)	6 5	7 4	30	109.5	145.0	150.5

注) 大阪管区気象台『大阪の気象年表』(各年版) および大阪府土木部河川課『大阪府の雨量』(第4・5集)により作成。

注目される。

梅雨は春から夏への移行期に梅雨前線が日本付近に停滞することによって生ずる雨期で、梅雨前線の働きが活発な西南日本で顕著に現われる。表5は近年における大阪の梅雨期とその間における大阪・原・樫田の降水量を示したもので、通常は六月中旬に入梅となり、七月中旬の梅雨明けまで約一ヶ月間雨の多い日が続いて、その降水量は三五〇〜四〇〇ミリメートルに達する。この梅雨期の降水は、むかしから田植にとってはなくてはならないものであり、近年は都市部における夏の用水需要になえる重要な役割をも有するようになってきているが、年によってその変動が大きく、さまざまな影響を与えている。

いわゆる集中豪雨が現われやすいこの時期で、一九三八(昭和一三)年七月五日に神戸で一日の降水量二七〇・四ミリメートルを記録して、六甲山の山津波をはじめとする阪神大水害を起した豪雨がよく知られている。

る。最近では一九六七年七月九日に台風七号くずれの低気圧が梅雨前線に吸収され、中九州から瀬戸内海を東北東に進んで大阪付近を通過したため、六甲山では再び土石流が発生し、神戸市街に大きな被害を与えた。府下では北摂山地を中心に日降水量二〇〇ミリメートルを越える豪雨に見舞われ、高槻市内でも一部の地区が浸水した。この年の梅雨は、入梅が六月二日と遅かったにもかかわらず七月一三日には梅雨明けとなつて、二日間という異状に短い梅雨期ではあつたが、梅雨前線の活動は例年になく活発で大雨が集中的に降つたのを特色としている。

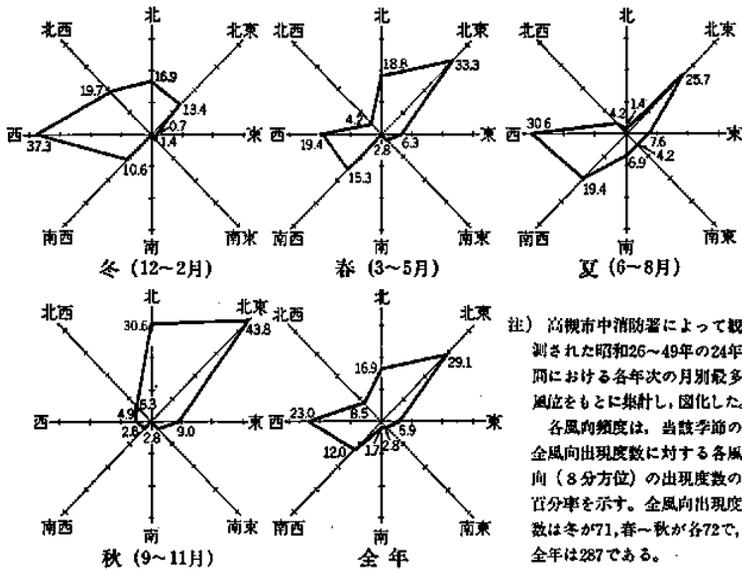
これに対して梅雨期の降水量が異状に少ない空梅雨の記録も少なく、一八九四（明治二七）年や一九二四年、二九年、三九年、四四年などが知られ、最近では一九七三年の異常渇水が記憶に生々しい。この年は六月五日には早くも入梅宣言が出されたものの、梅雨前線は南方海上に停滞して北上することが少なく、比較的晴間の多い梅雨期が経過して、七月四日には南海上で梅雨前線が消滅してしまつた。この間の降水量は大阪で一〇九・五ミリメートルと平年の三分の一以下にとどまり、しかも梅雨明けの後は連続二八日間雨が降らず、無降水継続記録を更新したうえ、八・九月も平年より雨量が少なかったため大変な水不足をきたし、上水道や工業用水の時間給水が実施された。

梅雨期について降水量が多いのは台風・秋霖期である。秋霖は「秋の長雨」ともいわれ、夏から秋への移行期に梅雨前線とよく似た秋雨前線が日本付近で停滞するために雨の降り続く日が多くなる現象で、この時期がちょうど台風の変来期と重なるため、台風が秋雨前線を刺戟すると大雨が降る。一八九六（明治一九）年に琵琶湖の水位をプラス三・七三メートルまで上げて琵琶湖・淀川流域に大洪水を引き起し、新淀川の開削

1 高槻の自然環境

や三川合流点の河道整備、瀬田川洗堰の設置などを中核とする淀川改良工事の直接的な契機となった豪雨や、一九一七（大正六）年一〇月一日に淀川右岸大塚町の堤防を決壊して市域南部に大洪水をもたらした豪雨、一九五三（昭和二八）年九月二五日に芥川右岸および桧尾川左岸の堤防を決壊して上牧地区を中心として大きな浸水被害を出した豪雨などは、いずれも台風と秋雨前線が重って発生したものであった。

一方、冬の積雪は高槻市内ではほとんどみられない。これは高槻市域が丹波山地の南端にあたる北摂山地の南側に位置して冬季の降水量が少く、市域南部の低地では気温も比較的高いため、北部山地の原や椋田でも積雪より凍結のほうが卓越している。南部の低地で降雪をみるのは、ひと冬に数回、北西季節風の吹き出しが強いときに、北摂山地を越えて運ばれてきた雪



注) 高槻市中消防署によって観測された昭和26~49年の24年間における各年次の月別最多風位をもとに集計し、図化した。各風向頻度は、当該季節の全風向出現度数に対する各風向(8分方位)の出現度数の百分率を示す。全風向出現度数は冬が71、春-秋が各72で、全年は287である。

図43 高槻の風向

表6 京阪神地方に大きな影響を及ぼしたおもな台風

台風名	台風 の型	最低中 心気圧	大 阪 の 状 況				
			接近年 月 日	中心気圧	最大風速	瞬間最 大風速	降水量
		mb		mb	m/sec	m/sec	mm
室戸台風	風台風	900以下	1934.9.21	954.1	南 42以上	南 60以上	
ジェーン台風	〃	940	1950.9.3	970.3	南 28.1	南 44.7	64.7
13号台風	雨台風	897	1953.9.25	977.4	北北西22.0	北北西28.9	176.1
伊勢湾台風	風台風	894	1959.9.26	956.4	北北東19.9	西北西27.4	58.6
第2室戸台風	〃	885	1961.9.16	937.3	南南東33.3	南南東50.6	44.2
20号台風	〃	895	1964.9.25	987.4	南南西19.0	南南西31.7	26.5
23号台風	〃	936	1965.9.10	976.2	南 17.3	南南東33.1	60.6
24号台風	雨台風	935	1965.9.17	978.6	北 14.7	北北西29.5	144.1

(大阪管区気象台資料による)

がちらつく程度である。

風と台風

図四三は高槻市中消防署から発表された一九五
一〜七四年の二四年間における月別最多風向を
集計して作成したもので、日々の風向観測記録をもとに作成さ
れる通常の風配図とは若干性格を異にするが、高槻における卓
越風の方向はほぼ示されていると考えられる。これによると、
高槻の風向は、年間を通じてみると北東風と西風が卓越し、南
風や南東風がほとんどみられない。これは北摂山地の南麓に位
置するという地形的位置によるところが大きく、わが国で卓越
する冬の北西季節風および夏の南東季節風が、ともに高槻へは
北摂山地の山麓線に沿って吹きこんで来ることによるものであ
ろう。

季節的な風向の違いをみると、冬(一二月)と夏(六七八
月)には西風が卓越し、春(三五月)と秋(九十一月)には北
東風が卓越している。これに次いで多いのは冬には北西風と北
風、春には西風と北風、夏には北東風と南西風、秋には北風と
なっており、各季節の風向を特色付けている。

I 高槻の自然環境

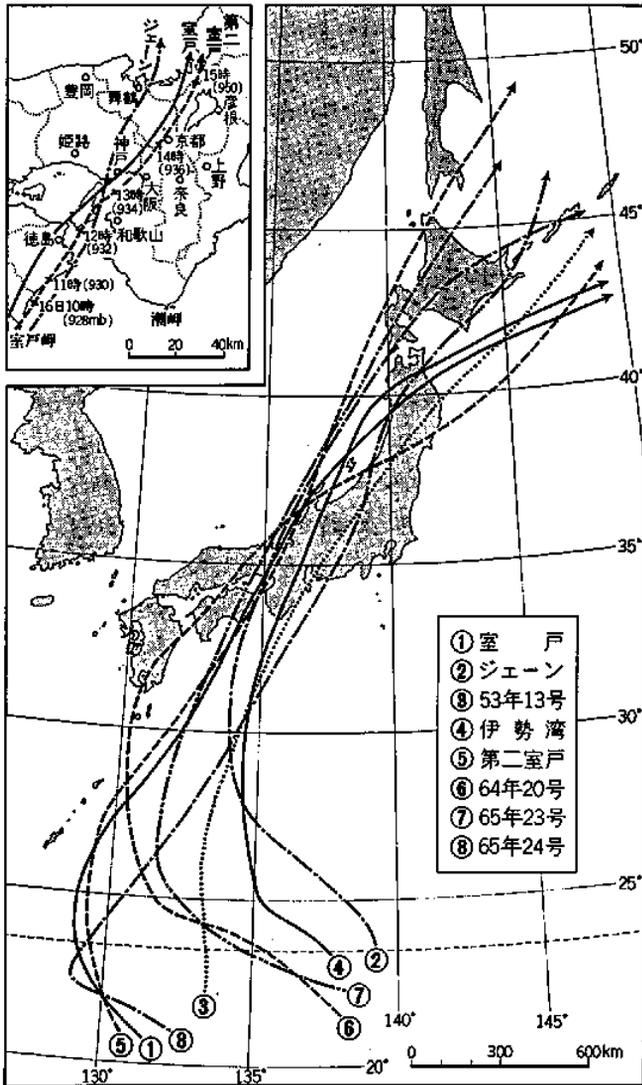


図44 近畿に災害をもたらしたおもな台風の進路

高槻市を含む近畿地方中央部は、南部や北部ほどには風の強くない地域である。このことは高槻市中消防署の観測記録にも明瞭に示されており、一九六〇〜七四年の一五年間における年間平均風速は〇・九三〜一

・七メートル／秒にすぎない。比較的強い風が吹くのは季節風の卓越する冬季で、一九六三年の一月と二月に二五メートル／秒の最大風速が観測されたのをはじめ、一〇メートル／秒以上の強風が吹く日も少くないが、その他の季節には、台風襲来時をのぞけば強風の吹く日はほとんどみられない。

一九六〇年以降、高槻市中消防署によって観測された最大風速は一九六一年九月一五日に京阪神地方を襲った第二室戸台風（台風一八号）時の四五メートル／秒で、以下一九六五年の台風二三号による三〇メートル／秒（九月一〇日）、一九六四年の台風二〇号による二九メートル／秒（九月二五日）と、いずれも九月の台風襲来時の記録が続いている。このことから知られるように、高槻地方に強い暴風をもたらしたのはいずれも台風であった。

表六は高槻市を含む京阪神地方に大きな影響を与えたおもな台風を列挙したもので、その通過コースは図四四に示されている。これをも注目されるのは、京阪神地方に強い暴風が吹き荒れた台風のコースはいずれも近畿地方中西部から北部を通っており、ことに京阪神の三大台風と呼ばれる室戸、ジューン、第二室戸の各台風が、ともに室戸岬付近から淡路島を通じて阪神間に上陸したのち北東に進んで若狭湾へぬけたのに対して、前述したように琵琶湖・淀川流域に豪雨を降らせて洪水をひき起した台風は、すべて紀伊半島南部から東海地方へぬけるコースをとっていることである。このように、京阪神地方にとって淀川の西方を北上する台風は風台風となり降水量はそれほど多くないが、台風が淀川の東方を北東進する場合には雨台風となる訳で、台風のコースによってその影響が大きく異ってくる。

第二節 高槻の生物

植 生

高槻市を含む北摂地域の植生については、専門家による調査報告書がいくつか発表されているので〔堀勝「北摂群山の植物」北摂群山地域調査書、大阪府土木部、昭三四、〔北摂山麓〕帯開発計画調査研究報告書〕〔吉野〕大阪府、昭四六、〔近畿圏保全区域等整備計画策定に関する調査報告書、北摂山麓区域〕、同調査書七四四〕、それらによりながら高槻市域における植生の現況について概観しておこう。

植生は、一般に地形・気候・土壌などの条件によって地域的に異なり、また自然の植生は長い歴史の中で自然的にも、また人為的にも大きな変化をうけて今日に至っている。北摂地域は地形的には低山性の山地や丘陵・台地・低地からなり、気候的には全般に暖温帯に属しているので、本来の自然的植生は、大部分の地域が照葉樹林帯に属しているが、標高六〇〇メートルを越える本山寺からポンポン山にかけての尾根づたい一帯などには、わずかながらミズナラ・ブナなど冷温帯に特有の落葉広葉樹林がみられ、両者の中間にはモミヤツガを特徴とする暖帯落葉樹林が分布している。

暖温帯照葉樹林は、シイ（スダジイ・ツブラシイ）とカシ（アラカシ・ウラジロガシ・アカガシ）で代表される常緑広葉樹で、かつて人間による伐採が行われる以前には、北摂地域の代表的な自然植生として広く分布していたと推定されているが、数千年におよぶ人間居住の歴史を通じてしだいに姿を消してゆき、今日では社寺の境内や河川沿いの急斜面などにわずかに残されているにすぎない。これらのうち、比較的森林に近い形を保持しているのが本山寺や神峰山寺の境内林で、これらは信仰的な理由でよく保存されてきたため老木

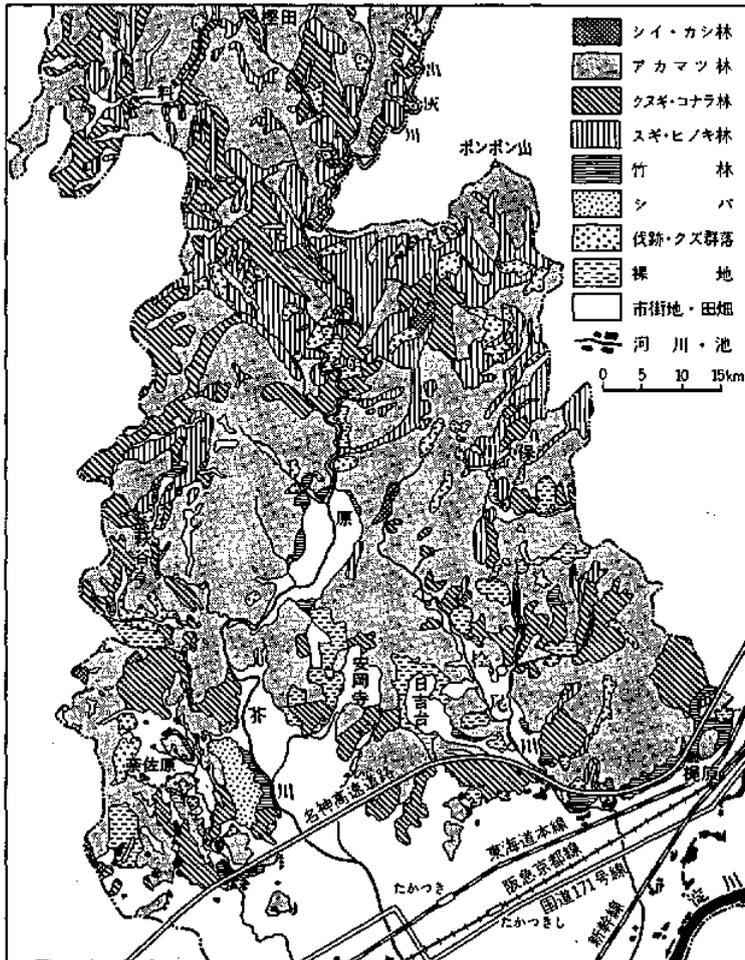


図45 高槻市北部山地の現存植生図

が多く、樹高二〇メートル程度に達する樹木も稀ではない。本山寺ではカシ類が優占し、神峰山寺ではスダジイが卓越している。このほか、安岡寺境内のスダジイ、成合春日神社のアラカシ、川久保諏訪神社や原中村八坂神社のスダジイとアラカシもよく保存されている。

これに対して、高槻市域の山地をもっとも広く被っているのがアカマツ林で、一般に樹高一〇メートル以下の低木林によって占められており、クヌギやコナラとの混交も多い。この植生は関西地方ではもっとも一般的な二次林（代償植生）で、照葉樹林の伐採跡地に生育してきたものと考えられ、萩谷や樫田地区の杉生・中畑ではアカマツ特有の赤い樹幹が遠くからでも鮮かに望まれる樹令五〇〜一〇〇年の美しい純林がみられる。

アカマツ林に次いで多いのがクヌギ・コナラをおもな構成種とする落葉性雑木林で、これも関西地方に多い二次林であるが、かつては薪炭林、農用林として活用されていた。しかし、近年はこれらの需要が著しく減少したため、下刈りや落葉掻きなどの管理作業がほとんど行われずに放置されている結果、ほとんどがブッシュ状を呈し、紅葉期を除いては、かつてのような雑木林としての美しさはみられなくなった。

一方、今日もおお経済林としての有用性をもっているのはスギ・ヒノキ林で、川久保および原ノ樫田間の山地に多く分布している。この林はほとんどが人工的な植林地で、日照が少なく、土壌が比較的湿っている谷間に沿って、下の方にはスギ、上の方、つまり中腹にはヒノキが栽植されて、群落組成が単純な林相を呈している。尾根付近の乾燥するところではアカマツに変わっている。

このほか、安清山の南麓に付着する丘陵地や南平台の東斜面などにはモウソウチクの竹林がみられ、梶原

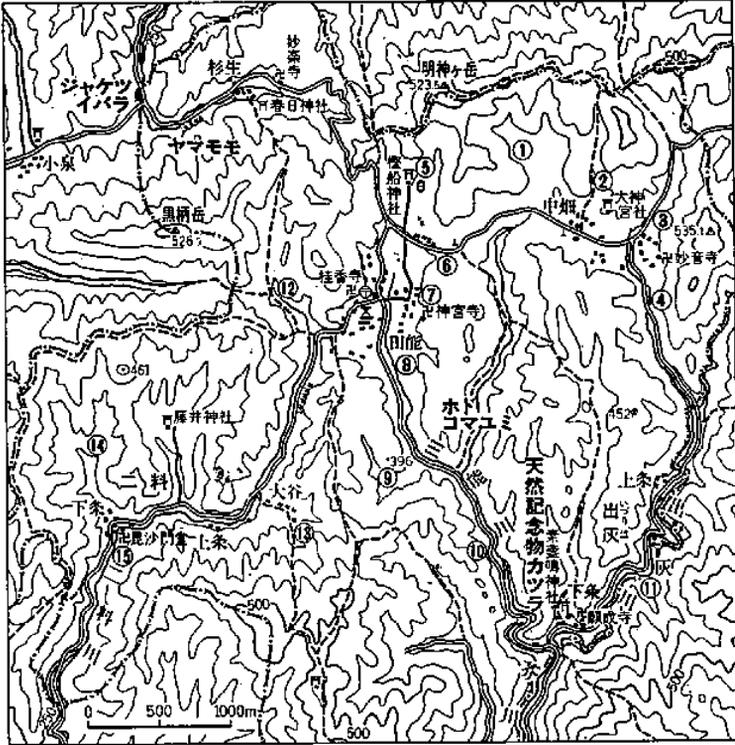


図46 檜田地域主要植物分布

の畑山神社境内には樹高一三メートル余に達するクスがそびえている。また、北部の川久保集落に近い水無瀬川河谷には自然に近い形をとどめるケヤキ林が生育し、出灰下条の素盞鳴神社にある樹令約三〇〇年と推定されるカツラの大樹は府下最大のもので、府指定天然記念物となっている。一方、市域東部の鶴殿地先にひろがる淀川河川敷には広大なヨシ原がみられ、このヨシは古代以来雅楽器の原料として珍重されてきた。

しかし、北摂山地南麓の丘陵地帯や、成合北部および芥

I 高槻の自然環境

表7 榎田地域の植物群

植物群の名称	おもな構成植物
①寺谷植物群	トキソウ、サワギキョウ、カラカサゴケ、スイラン、キセルアザミ、タニヘゴ、カキラン、ノハナショウブ、ウワミズグサ、テキリスゲ、ミヤマシラスゲ
②中畑神社植物群	ギンリョウソウモドキ、シハイスミレ、カヤラン、ウラジロムシカリ、キレンゲツツジ、ツクバネガシ、イワナンテン
③榎木東ノ原植物群	ヤブレガサ、アオイスミレ、エビネ、ニガキ、サワギク、ヒトリシズカ、ヤマドリソウ、フタリシズカ、シロダモ、イヌショウマ、ハエドクソウ、オカウコギ、ツルニガクサ、ハナイカダ、エンレイソウ、アマチャヅル、イカホウズキ、アワブキ、ゴマキ、ヌリワラビ、オオヒメワラビ
④西条植物群	ミヤマカタバミ、ホウチャクソウ、エンレイソウ、トンボソウ、ミゾホウズキ、カノコソウ、リョウメンシダ
⑤明神岳山足植物群	タニヘゴ、ツタウルシ、シハイスミレ、ヤマコウバシ、ササクサ、ハンノキ、イチヤクソウ、センボンヤリ、ギンリョウソウモドキ、トウゲシバ、サルマメ、モミ、キッコウハグサ、コウヤノコケシノブ、ムラサキニガナ、ミツデウラボシ、ユシダ
⑥ウナ谷植物群	スイラン、カキラン、キキョウ、ウメバチソウ、キセルアザミ、ツリガネニンジン、サワギキョウ
⑦清水、鳥居垣内植物群	カキラン、サンショウモ、ミズトンボ、クロバナヒキオコシ、サワギキョウ、サワヒヨドリ、ネジバナ、チタケザシ、ノリウツギ、コイケマ、トコロ、アリノトウグサ
⑧料谷、寿代植物群	アオゴウソウ、ゴウソ、オタルスゲ、アゼスゲ、コジュズスゲ、クロカワズスゲ、ジュズスゲ、シラコスゲ、ニシノホンモンジスゲ、コカンスゲ、マツパスゲ、ホナガタツ、ナミノソウ、クララ、スズサイコ、タチカモメズル、タチシオデ、カラカサゴケ、オオミズゴケ、アギスミレ、カマツカノキ、ミズオバコ、タヌキモ、サンショウモ
⑨畑子谷植物群	オオナルコユリ、ヤブデマリ、モミジガサ、エビズル、ハンショウズル、オトコノブドウ、オタカラコウ、ササノハスゲ、ヒゴダサ、ウマスゲ、ミヤマシラスゲ、ヤマアゼスゲ、メギ、イヌザンショウ、マユミ、ヤマジノホトトギス、ウリハタカエデ、コブシ、ホウ
⑩田能川沿い植物群	イカリソウ、キツネアザミ、ジヤニンジン、ヤマタザオ、カワミドリ、タニジャコウソウ、ミヤマウスラ、ツチアケビ、イチリンソウ、ツリフネソウ、コゴメウツギ、ナルコユリ
⑪八つ滝植物群	ジュウモンジシダ、エンレイソウ、イワタバコ、ランショウモンカズラ、マタタビ、カヤラン、ミヤコアオイ、サワギク、ミズナ、コウマノマンネンゴケ、ヤマアジサイ、ミヤマカタバミ、オオバノイノモトソウ、カワラハシノキ
⑫西浦植物群	シャシャンボ、アセビ、アラカン、ツラカン、エゴ、アカガシ、ニシキギ、リョウブ、クロモジ、フジカンゾ、ウスキョウラク、コバノミツバツツジ
⑬大谷植物群	ツルギミ、ウリノキ、チャルメルソウ、クジャクシダ、オカタツナミノソウ、ミカエリソウ、ハンショウズル、ユクノキ、ユクサギ、オタカラコウ、モミジガサ、マタタビ
⑭焼山川植物群	ヒメユリ、マツカゼソウ、ジュウモンジシダ、ヤマアジサイ、クジャクシダ、ヒメワラビ
⑮二科垣内植物群	コウヤワラビ、ツルボ、サネカズラ、クチナン、オカギボウシ、サルナン、オオイトスゲ

高槻市教育研究会理科部『榎田植物誌(2)』昭39による。

川上流の河谷では、大規模なゴルフ場の開発が既存の二次林をシバ草原に変え、宅地造成や採石・採土の盛行が植生を破壊しており、北部山地でも二次林伐採跡が植林もされずに放置されるなど、大都市近郊に特徴的な現象が随所で見られる。

樫田の植物

こうしたなかにあつて、市域北端の樫田地区は今日もなお豊かな植生に恵まれ、その冷涼な気候が府下では珍しい高山性の植物をよく生育させていることで知られている。図四六および表七は、長年樫田地区で植物の研究を続けている渡辺登（高槻市立樫田小学校長）の研究成果によって、主要な植物群の分布と各植物群を構成するおもな植物名を示したものである。

これらの植物群の中でも注目されるのは、明神岳の南東斜面に源を発する溪流によって形成された寺谷湿地帯の植物群で、濃紫色のノハナシヨウブや帯白紅紫色のササユリなどが開花する初夏の頃、および青紫色のサワギキョウ、橙赤色のコオニユリ、帯白紅紫色のサワアザミ（キセルアザミ）、白色のノリウツギなどが咲き揃う晩夏の頃は、この湿地帯のもっとも美しい時期である。この湿地帯ではまた、府下唯一の分布地といわれるタニヘゴやノハナシヨウブもみられる。

また、あちこちに草本類の群生地がみられるのも樫田の特色で、樫田地区の南端で芥川に注ぐ岡山川の谷には地区最大のフタバアオイの大群生地があり、中畑川に沿っては、源流域に近い桜木東の原にイヌシヨウマ・トリアシシヨウマの群生が点在して、ヤブレガサの大群生へと続いているほか、モリノ西条から西方へ山道に入ると、やぶの中にホウチャクソウの群生がみられる。田能川沿いでは、明神岳南方山足のスギ林の中を流れる溪流に沿った湿地帯にみられるタニヘゴの大群生が府下最大級の分布地として特に注目され、二料川の

流域では、全域にわたって、溪流沿いやちよつとした湿地にもツリフネソウが群生して晩夏から中秋にかけて濃紅色の花を一面につけており、川久保地区のそれとともに、南城北部の溪流周辺の特色をなしている。

木本類では田能の檜船神社裏の原生林が注目され、ツガ(トガ)を高木、ヒノキを亜高木として、低木にはウシカバ、サカキ、アセビ、ソヨゴ等を配して、自然の景観をよく保存している。この周辺には、コシアブラ、イモノキ(タカノツメ)、シラカシ、アラカシ、モミ、カヤ、ウスギョウラクなど、やや寒冷地のものが多く、原生林の奥はアカマツ林となつて明神岳へと連つている。

動物

北摂山地は、低山帯としては鳥相が豊かなことで知られている。これは、府下屈指の鳥類繁殖地である箕面溪谷の山林が、一八九八(明治三一)年に府下最初の自然公園に指定されて、その豊かな自然環境が保護されてきたこと、大規模な伐採・植林がほとんど行われておらず、植物相が豊富で鳥類の生息にもっとも適した落葉性雑木林が広がっていることにおうところが大きい。

通年この地にとどまり、あまり移動しない留鳥では、カラス、スズメがもっとも目立つが、溪流にすむカワガラス、広葉樹に営巣するヒヨドリのほか、ウグイス、シジュウカラ、ノバト、キジ、ヤマドリ、メジロ、アカゲラ、カケスなどがみられ、アカマツ林にはトビやクマタカが生息している。渡り鳥では五月上旬から九月下旬までホトトギスの鳴き声がよく聞かれ、冬にはオシドリやカイツブリが飛来して用水池に姿を見せる一方、ガンの仲間も中継地として利用している。

昆虫類もまた種類が豊富で、トンボ、バッタ、カメムシ、チョウ、ガ、甲虫、ハチなどが多く、チョウは八〇種以上が調査されて、府下ではもっとも豊富である。先年檜田地区で確認されたギフチョウ、スミナガ

シは、すでに府下では絶滅したといわれていたものである。哺乳類ではリス、ウサギ、ノネズミ、カワネズミなどの小型哺乳類のほか、キツネやタヌキ、イタチなども生息し、移動性のものとしてはイノシシやサル、シカが出没する。中でもイノシシは春と秋に姿を現わし、春にはタケノコを、秋には稲の穂った田や豆類、イモ類の畑を荒して耕地に被害を出している。このため、櫻田地区をはじめ、川久保、萩谷など山間部の田畑には猪垣がめぐらされており、これらの地区では毎年数頭〜十数頭のイノシシが捕獲されている。

爬虫類では、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリやトカゲの仲間などがよくみられ、甲らのふちがびゅつとそつたクサガメも生息している。軟体動物ではシジミやタニシなどの貝類や、カタツムリの仲間では、ふちが赤く染まるツバベニマイマイがおり、両生類ではモリアオガエルが多く、櫻田地区ではその卵が白いアワを作ってぶら下っているのをよく見かける。芥川上流の溪流に棲むヒダサンショウウオも珍らしい。

魚 類

高槻市域で魚類が多いのは芥川と淀川で、桧尾川や水無瀬川には少ない。芥川上流の魚類については渡辺登によって調査報告書が発表されており、〔渡辺登「櫻田魚類誌」昭四六、〔芥川上流の魚〕類、高槻市教育研究所理科センター、昭四八〕 それによると、芥川では源流部から下流までの間で魚類の分布がはっきり分れているという(図四七)。すな



写16 櫻田のイノシシ (櫻田支所提供)

1 高槻の自然環境

園橋の間ではカジカやアカザがこれに加わり、三国橋から下流の芥川本流ではタカハヤがしだいに少なくなつて、オイカワやカマツカ、カワヨシノボリが目立ってくる。原大橋から下流になるとタカハヤが姿を消し、タナゴが現われる。摂津駅入口の下ノ口大橋から下流では河床に人手が多く加わり、水質も悪化してゐるため魚影をみることは少なくなる。

芥川以外では、二料川や年谷川にもタカハヤ、カワムツ、カワヨシノボリ、ドンコなどが生息し、椋尾川では神峰山寺付近の源流部にタカハヤがいるが、下流は淀川と同じである。水無瀬川上流は、かつてはタカ

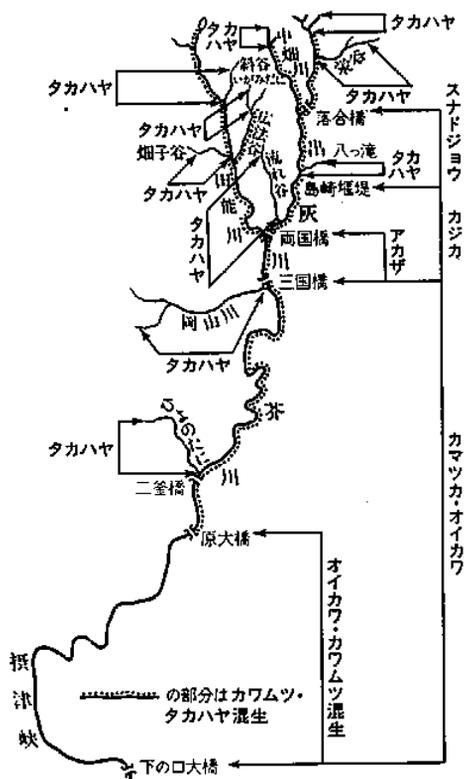


図47 芥川上・中流の魚類分布図
 (高槻市教育研究所理科センター、高槻市教育研究会理科部『芥川上流の魚類』1973年による)

わち、田能川や出灰川の源流およびこれらに注ぐ小支谷にはタカハヤのみが生息し、その下流は原盆地北端の原大橋までがタカハヤとカワムツの混生地となつているが、その間、出灰川では落合橋と島崎堰堤間ではスナドジヨウが、島崎堰堤と三

ハヤのみの生息地であったが、一九七四（昭和四九）年一〇月にアマゴが放流された。川久保から下流の水無瀬川にはカワムツもみられ、尺代付近になるとオイカワが出現する。

一方、淀川は、かつてはそこに生息する魚族の種類と量が多いことで知られ、日本の淡水魚の宝庫とまでいわれて、沿岸には漁業で生計をたてる人も少なくなかったが、明治以来の河川改修が魚類の生息、繁殖場所を失うに奪い、近年は沿岸の都市化、工業化によって水質が悪化してきているため、すでにこの水系から姿を消してしまった魚種も多い。高槻市域に属する松尾川、芥川の合流点付近で確認される魚族は、今日ではコイ、ギンブナ、ヘラブナ、ウナギ、オイカワ、モツゴ、ヤリタナゴ、シマドジョウ、カワヨシノボリ、スッポン、ヌマエビ、アメリカザリガニなど十数種を数えるにすぎなくなっている。